

|         |                            |  |  |
|---------|----------------------------|--|--|
| 氏名      | 龐 夢雅 (PANG Mengya / ホウ ムガ) |  |  |
| 学位の種類   | 博士 (芸術)                    |  |  |
| 学位記番号   | 甲第91号                      |  |  |
| 学位授与日   | 令和4年3月15日                  |  |  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当               |  |  |
| 論文題目    | 「移動」に伴う「理想郷」を探る絵画表現試論      |  |  |

|      |      |                 |       |
|------|------|-----------------|-------|
| 審査委員 | 主査   | 教授              | 小川 敦生 |
|      | 副査   | 教授              | 松浦 弘明 |
|      | 副査   | 文化庁 参事官(芸術文化担当) | 林 洋子  |
|      | 指導教員 | 教授              | 古谷 博子 |

## 内容の要旨

筆者は、短い人生の中にも様々な「移動」があった。高校時代から十回以上にわたる転居と旅を経て、その都度新しい環境に対する新鮮な気持ちと違和感を交互に積み重ねてきた。様々な風景の積み重ねこそが筆者の創作の源泉でもある。

自作論を通じて、自分なりの「理想郷」という言葉の定義を明確にし、自身のリアリティーを模索する。つまり、移動という身体行為の中で、内的な理想郷を探求することが目的である。

「移動」とは、ある場所から別の場所に変わることだ。

そして移住という言葉には住居を移すという意味が含まれている。「移動」という言葉に付随する運動行為は「移住」に比べて頻度が高く、移住という言葉には一定の安定感がある。しかし現在、頻繁な移住という現象がグローバル化と様々な文化の共存に関するトレンドのトピックとなっており、多くの地域でのそれぞれの習慣の違いや妥協点について議論し、人々の間に存在する誤解を和らげ将来的に安定した家庭を共に築くことを望んでいる。戦争と混沌の時代であった前世紀の「大移動時代」を経て一見平和な時代となった今では、利便性の高い交通手段の普及に伴い、人々の移動が再び頻繁になり、「新移動時代」が到来したと言えるかもしれない。しかし、時代変わっても、「人間の暮らす場所」は必要不可欠だ。より良い未来のため、人々は自分自身が思い描く理想的な場所へ移動したいと考えている。人間的な優しさがあり、人々が互いに愛し合い、貧困がなく、誰もが平等で、自分の野望を実現できる場所を目指している。しかし、そのような場所は現実には存在しない。現実の中では、様々な争いや、不公平、理不尽が形作る人間の暗部があり、多くの場合、物質的な世界の現実、私たちに妥協や諦めを強いるものである。世の中には、決して怒りや悲しみだけではなく、ポジティブな面とネガティブな面が隣り合わせに存在する関係性がある。したがって、現実の世界では、不条理が存在すると同時に、愛や優しさ、そして理想を実現する可能性が存在する。それによって私たちは未来に対して希望を持ち、理想を実現するための今日の理想郷を続けて探求することが重要だろう。

第一章では、中国出身の筆者が母国で影響を受けた伝統文学絵画から引用される理想郷としての「桃源郷」を改めて解釈した。第一節「桃源郷」における詩と画を通じて、その源流から

人々の持つ桃源郷のイメージを見出す。第二節では、もう一つの理想郷の代名詞として広く知られる「アルカディア」に関する作品の解説と分析を行い、広義の理想郷のイメージは共通の固有名詞がありながらも千差万別であるということを論じられる。この観点から、個人の理想郷の差異を強調する必要があると筆者は考えていく。

第二章では、第二次世界大戦の混乱した状況下で「移動」を巡るアーティストについて分析した。東洋と西洋文化が人々の移動によって融合する中で、カンディンスキーと藤田嗣治の二人にフォーカスする。彼らの作品と地理的な移動の体験を分析し、前世紀の作家と現代の移動者の移動プロセスの共通性（表面上の地域間の文化的差異ではない）から、二人が描き出した理想郷の側面を明らかにした。そして、自らの「理想郷」の解釈を広げる。

第三章では、前二章での分析を踏まえて、筆者自身が様々な場所に移り住んだ経験に基づいて制作した一連の作品について論じた。まず、筆者の過去の作品を再考し、過去のイメージを現在に繋げた上で、「移動」という視点を持って制作を進めた。アーティストは、外部の物事に対して敏感に思考する必要があるとあり、既存の表現方法に固執すれば、現在のアート界に現れる多様な融合する表現は生まれなかつただろう。従って、本章では筆者の使う表現材料の歴史を辿りながら、材料の試用結果から「総合芸術作品」を強調する制作に至った経緯を説明する。そして、その具体的な画面の内容と展示方法の変化、新しい画稿と初期の画稿が大きく変化する過程を述べた。自らの移動に伴う理想郷を探る過程で、新たな移動時代が移動プロセスにもたらす効果の二重性を軸に、現実の世界がその希望的な側面とネガティブな側面を明らかにした上で、自身の「理想郷」という定義を新たに示した。

結論では、第一章から第三章までの「移動」に伴う理想郷の探求についての総論を述べる。科学的な機械文明の発展に伴い、大都市圏も急速に形成されている。大都市では上質な教育と、医療や就職のチャンスが多く、若者たちを惹きつける一方で、居住にかかるコストも高く、競争も激しい。そのような環境で生き残るために、頻りに引っ越しを迫られることになっている。改めて、著者はこれらに思いを馳せる。最後、今日の自身のリアリティーを掘り出しつつ、自らの「理想郷」を明らかにする。

## 審査結果の要旨

ハウムガさんは、中国・大連市出身のアーティストである。さまざまな事情から、これまでに数多くの引っ越しを経験し、中国および日本の13もの地域の間を移り住んできた。その自らの経験をもとに、「移動」と美術家の関係について考えようというのが、本論執筆の発端だった。

「移動」が美術家に何らかの刺激をもたらすことを想像するのは、それほど難しい話ではないだろう。見知らぬ土地への移動はそれだけで日常を脱するための大いなる刺激になり、美術家たちは新しい感性を開く。ハウさんのような「移住」は、さらに大きな変化を美術家たちの心の中にもたらすはずだ。土地土地で社会のありようは異なり、言葉が違えば住人たちの根本的な思考のあり方も違って来る。いったん移住してしまえば、そう簡単にそこから逃げ出すこともできない。

ハウさんが「理想郷」という研究テーマをはっきりと提示したのは、博士後期課程の2年次のことだったのだろうか。理想郷は中国では「桃源郷」、西洋では「アルカディア」といった言葉で語られることがあり、ハウさんもこの論文で大きく取り上げている。つまり、洋の東西を問わない概念ということだ。それはまた、大半の人たちにとって、自分たちが住んでいる場所が理想郷ではないと感じていることの裏返しなのだろう。そして、ハウさんが理想郷を求める意欲を持ち続けられるのも、想像力や創造力が豊かな美術家だからなのかもしれない。

実は、ハウさんが「理想郷」をテーマにしたいと伝えてきたとき、それは本当に可能なのか、あるいは現実的なのかという、実につまらない疑問が、脳裏をかすめた。またその時、ハウさんは自

分が博士後期課程で「移動」という概念とどう向き合うのかをはっきりと見定められていない状況でもあった。しかし、「理想郷」を見据えた彼女の言葉は決然としていた。おそらく、自分が日頃から何を求めて美術作品を制作しているかを、何度も自問したに違いないのだ。現代の美術家は、「理想郷」をどう表現するのか。そこに大きな可能性があるように見えた。そして、改めて「理想郷」をテーマに作品を制作し、論文を書き進めていくことになった。

まず調べたのは、桃源郷のこととアルカディアのことだった。特に桃源郷は、中国出身の美術家としては、馴染み深いはずだ。それを後に、意外なところで私たち教員は思い知らされることになった。修了制作として出品した中の1枚に、巨大な花びらを表現した絵があったのだが、当初日本の上野公園を象徴させて描いたと言われたことから、私たちは皆、桜だと思い込んでいたのだが、実は桃の花だったというのだ。もっと正確に言えば、桃の花でも桜の花でもいいと言う。見た人が感じた通りの花だというのだ。抽象表現ならいざ知らず、具象的な、しかも花の大きさが1メートルくらいはありそうな巨大なモチーフで、そうした柔軟な解釈を許容するのは珍しい。だが、大切なのは、鑑賞者の心のありようだったのである。考えてみれば、私たち日本人が浮かれ騒ぐ春の花見は、その間だけ「理想郷」にいるということなのかもしれない。そして、桜の花はたいいていの場合、わずか2週間ほどで散ってしまう。桃源郷が幻と消えるのは、あまりにも人々の心をよく映しているようにも思える。このエピソードだけを考えても、ハウさんの「理想郷」がかなり観念的なものであることがわかる。

ハウさんが、移住を多く経験したヴァシリー・カンディンスキーと藤田嗣治の2人について、常に「理想郷」ということを念頭に移住と作風の間を調べたのは、逆に現実には起きたことを検証する視点からだったとみられる。そして、永続するわけではないにしても、ハウさんの検証によって、彼らが求めた理想郷の姿の一部が、おぼろげに見えてくる。かの画家たちは、多かれ少なかれ、それぞれの理想郷を作品の中に表現していたのである。彼らがその理想郷に居続けることができなかった実情も見えてくる。それは現実の世界における理想郷の存在の困難さをも物語るのかもしれない。しかし、それでも画家たちは表現を続ける。それはハウさんにとっても希望のよりどころとなっていたはずだ。

ハウさんは、制作と論文執筆が架橋に入ろうかという時期に、コロナ禍に見舞われた。この災禍は多くの美術家に活動や経済面で深刻な状況をもたらしたと推測できるが、ハウさんの場合は素材や技法、展示の仕方の試行錯誤とその成果をどう見せるかという点において、特に大きな支障が生じたように思う。「移動」そして「理想郷」を表現するのにふさわしい素材や技法を求め、木版画や水彩、絹や紙等を行き来しながら、最適の解を求め続けた。中国と日本の絵画用紙の工場を取材するなど、自分に向いた素材を探し出そうという努力を惜しまなかった。そして、水彩、ボールペン、白麻紙を使用することが、ハウさんの表現手法には最もふさわしいという結果を得た。

一方で、コロナ禍が日本国内で広がり始めた2020年度初めは、学内のアトリエではなく自宅での制作を余儀なくされた。そのうえ、その成果を評価・吟味する立場にある教員が作品を実見する機会が極めて限られ、また、対面での講評が難しい状況が発生した。技法や素材が表現内容と密接に結びついているため、教員も、ビデオ会議システムを使っての作品評価を極めて慎重に行った。そして感染対策を十分に施したうえで教員たちが作品を実見する環境を同年度前期後半以降に実現した。作品の中に「理想郷」を求め続ける姿勢は揺るぎを見せず、少しでも時間と環境があれば、連作として新たに作品を描き続ける様子が、よくわかった。

その結果生まれた「理想郷」をテーマにした作品群は、淡く、軽く、少しの風に揺れるインスタレーションとして成立した。論文と作品を見て改めてわかったのは、ハウさんがまだ見ぬ理想郷を求め続けているだけでなく、移住を繰り返した過去の経験の中にも散在することがあったということだ。

ところで、ここで一つ、印象的な作品を挙げておきたい。中国・大連市で工場の煙突から煙がもくもくと立ち上っている様を描いた1枚だ。桃源郷などが都会とはまったく別の場所にあるだろうことを考えれば、工場はもちろん、理想郷とは程遠い存在である。論文の中にも「私にとって好ま

しい記憶ではない」と書かれている。しかしもともと灰色で表されていた煙が、あるとき赤に転じた。ハウさんは、北斎の赤富士を連想したことを論文に記し、むしろ「内なる感情」を表現したことを明らかにしている。つまり、表現の主体は実際の風景よりも心に移っているのだ。

ハウさんが修了制作で、現実世界を通り抜ける中で「理想郷」へといたる道造ったインスタレーションは、本論の執筆なくしては生まれえなかったものと思われる。重要なのは、それがハウさんの実際の「移動」の経験から生まれたというだけでなく、インスタレーションの中を歩いてもらうことによって、鑑賞者にも「理想郷」への道を歩いていることを感じてほしいということであるように思われる。審査をした教員たちは、論文に詳しく叙述した内容を具現化したインスタレーションから実際にそうしたことを感じ取った結果をもって、総合的に高い評価を与えるにいたったのである。

(小川 敦生)